

細田議長会見

説明責任果たさぬまま

「言論の府」の長として、その重い説明責任に誠実に向き合おうという姿勢は全くうかがえなかった。このまま、一国会議員として活動を続けるといっても、どれほどの信を得られるだろうか。政治への不信を払拭できぬまま退場する責任は重大だ。

体調不良を理由に辞任する細田博之衆院議長がきのう、記者会見を開いた。脳梗塞で治療を受けていたことを明らかにし、議長の公務に支障をきたす恐れから、不本意ながら辞任を決めたと述べた。議員にはとどまり、次の衆院選にも立候補の意欲を示した。

世界平和統一家庭連合（旧統一教会）との関係や、女性記者らへのセクハラ疑惑について、公の場で説明する初めての機会でもあった。だが、いずれも問題はないと言っばかりで、納得のいく説明は最後まで聞かれなかった。

教団との接点については、関連団体の会合への出席8回、祝電の送付3回などを認めているが、「呼ばれば出るという程度」だったと、「特別な関係」を否定。韓鶴子総裁の前で「今日の盛會を、安倍総理にさっそく報告したい」と述べたことも「リップサービス」であり、教団について安倍元首相と話したことは全くないと説明した。

がったかもしれないという反省が全くみられないことだ。週刊文春が報じたセクハラ疑惑に対しても、具体的に被害を名乗り出てきた人がいないとして、「男性に対するハラスメントじゃないか」などと、開き直りともいえる発言に終始した。

細田氏は自民党内で特に教団との関係が深いとされる清和政策研究会（現安倍派）の会長を約7年務めており、その言い分をうのみにはできない。会長当時の16年の参院選で、派内の前参院議員が教団側の支援を受けたことが明らかにしているが、この点についても、知らぬ存ぜぬの一点張りだった。

そもそも、この会見を説明責任を果たす場ととらえていたのかも疑わしい。参加者は1社1人に限られ、フリーランスに門戸は開かれなかった。所要時間も当初30分とされ、質問が続くなか、50分程度で打ち切られた。

細田氏を議長に推し、その資質に疑問符がついた後も、擁護し続けた自民党の責任も問われる。会派を離脱中だとして教団との関係の「点検」の対象外としていたが、党として改めて調査を求め、引き続き説明を尽くすよう促すべきだ。

驚くのは、自身を含む政治家の言動が教団の活動にお墨付きを与え、被害拡大につながった。